

# 岡山県生涯学習審議会及び岡山県社会教育委員の会議第5回会議

## 議事概要

日時 令和7年2月28日(金)  
10:00～12:00  
場所 県立図書館多目的ホール

### 1 開 会

### 2 議 事

- (1) 第1～4回会議の議論のまとめ
- (2) 多様なニーズに応じた公民館による学びの支援について  
(事務局) 外国人を対象とした取組について  
(実践発表) 「多文化共生社会を目指して～岡山市の公民館の取組～」  
「京山公民館における多文化共生の活動」
- (3) 審議「全ての人のウェルビーイングの実現に向けて、今後求められる方策について」

### 3 閉 会

#### <議事概要>

○事務局

「資料1」により第1～4回会議の議論の整理と本日の進め方について説明

会長	議論のまとめ及び本日の進め方について、事務局提案のとおりでよろしいか。
全員	了
会長	多様なニーズに応じた公民館による学びの支援について審議を進め、日本に在住する外国人のウェルビーイングについて考えていく上で必要な視点について共有していきたい。 県内公民館における外国人のウェルビーイングについての取組を事務局から紹介後、岡山市生涯学習課公民館振興室田中純子様と岡山市立京山公民館の柏崎希様に、外国人を対象とした取組について発表いただく。

○事務局

「資料3」により外国人を対象とした取組について

○岡山市教育委員会生涯学習課公民館振興室 主任 田中 純子 氏

「多文化共生社会を目指して～岡山市の公民館の取組～」

岡山市立京山公民館

主任 柏崎 希 氏

「京山公民館における多文化共生の活動」

会長	ただいまの発表について、質問があればお願いしたい。
委員	京山公民館の多文化共生の取組「フレンドリー京山」は、メンバーが減少しているということであったが、減少理由は何か。また「顔見知りのお隣さん」をつくる方法をお伺いしたい。
岡山市	<p>フレンドリー京山は、働く人が増える中でも平日の午前中に定例ミーティングを実施していることがメンバー減少に関係していると思われる。また、誰でも参加可能であることについてPRが不足しているかもしれない。</p> <p>「顔見知りのお隣さん」については、文化体験やお料理教室等は、日本人と外国人を同じグループ内に入れ、お互いに会話することで次に地域で会ったときには、顔を見知っているので声をかけられる。そういう関係が徐々に広がればよいと考える。</p>
委員	紹介された「Let's chat in Japanese!!」は、初回から20名以上の外国人の方が参加され、京山地球めぐりも様々な国の方が参加されているようである。広報の仕方をお聞きしたい。
岡山市	京山公民館には図書館も併設されており、本を借りに来られた外国人の方がチラシを見て参加して下さることもあるので、その点において他の公民館とは状況が異なる。やさしい日本語教室については、参加者確保に苦勞している館もあるが、中学生ボランティアが数名参加してくれたところもあった。参加者からは、中学生とも話ができ、異文化交流だけでなく異世代交流ができたと好評であった。
委員	地域への帰属意識を形成したり、交流機会を確保するために講座は開催されるが、どの程度日本語を話せる方が参加されているのか。基本的な日本語を話せる上で交流機会を求めて来られているのか。全く話せない方が参加したら、とても大変だろうと考える。
岡山市	やさしい日本語教室では、ある程度日本語が話せる外国人の方にグループ

ワークの中に入れてもらうが、通常の日本語教室には、全く話せない方も参加されている。

委員

大学の先生によるやさしい日本語の講義はどのような内容か。

岡山市

やさしい日本語が必要となった背景や経緯の他、やさしい日本語の有効性について講義を行っている。

やさしい日本語とは、擬音語や擬態語、尊敬語等を避け、ですます調の短い文章で話すものである。講義ではニュースによく出る言葉で演習している。例えば「高台に避難しましょう」が理解できない方が実際に東日本大震災時にいらっしゃったが、やさしい日本語に変換すると「高いところに逃げろ、逃げましょう。」となる。講義だけでは参加者も腹落ちしないので、後半は外国人の方と対話する時間をとっている。

委員

西粟倉村は、外国人の方は少ないが、I ターン者は増えている。移住により生活面で困りごとに直面したとき等、つながりづくりが大切であることは日本人も外国人も同じである。

岡山市の公民館では、外国人の方が公民館の取組に参加することで地域の方とつながる機会はできているが、これを機に公民館や職員が関わらなくても、つながりができた事例があるか。ある場合は、どのようなコミュニティができたか知りたい。

岡山市

岡山市内でも NPO 法人や任意団体等による活動が徐々に増えている。例えば、「INE (いいね)」というグループは、日本人の方が呼びかけ、主に就学前のお子さんを持つ外国人の家庭とつながり、公民館ではない場所で月に 1 回程度集まり、お互いに困っていることを話したり、施設見学に行く等の活動をされている。また、地域に在住するベトナムの方々や住民がつながったことをきっかけに、連合町内会長の声かけにより、防災訓練を合同で始めている地域もある。

委員

自分も地域の一員であるという感覚が芽生える取組がとても良い。メンバーが固定化しないよう、輪を広げる工夫等はあるか。

また、やさしい日本語は、いずれ次のステップアップが必要であると思うが、日本語の理解が進んだ段階の取組についても検討されているか。オノマトペ等も覚えたい等、参加者の意見を汲み取った企画について御紹介いただきたい。

岡山市

やさしい日本語の次のステップとしては、フレンドリー京山のようなグループを、各地域の公民館につくっていきたい。外国人の方とつながりたい地域住

民の方と、住んでいる外国人の方との交流機会が一過性にならないよう、年に数回実施していきたい。

外国人の方からは、岡山弁の意味を教えてほしいと言われることが多く、福浜公民館では、日本語講座で岡山弁の解説時間をとっている。まずはやさしい日本語による対話機会をつくり、交流が深まれば、岡山弁やオノマトペ等に発展していければ良い。

また、フレンドリー京山もメンバーの固定化が進み、大学生や高校生に手伝ってもらえたら等の意見が出ているが、実現に至っていない。

やさしい日本語講座をきっかけに関心のある住民の方が公民館に来られるようになった。外国人の方の手助けをしたいと思われていた方、他の地域で日本語教室のボランティア経験のある方等がやさしい日本語教室に参加してくださっている。これらのつながりを次に活かしていきたい。

委員 中高生等は、日本語講座等に来ているか。

岡山市 やさしい日本語講座に中学生ボランティアを呼びかけた館については、7～8名の中学生が参加している。これを機に多文化共生講座を中高生と共に実施したい。また万富公民館の進め隊には大学生が参加している。

京山公民館には、多文化共生以外の講座に中高生ボランティアが多数来てくれている。

会長 大変示唆に富む発表であったと思う。

これからグループ協議を行うにあたり、審議の進め方について事務局から説明をお願いしたい。

#### ○事務局

グループ協議の進め方について説明

#### ○3グループに分かれて岡山市実践発表について意見交換

### 【グループ1】

委員 自身も地域の一員であると感じ地域づくりに参画してもらうために、少しずつ地域に慣れてきた方には、公民館講座へ誘ったり、普段からあいさつする等、小さなことから始めることが大切だ。そういったことで外国人だけでなく地元住民にも安心感が芽生える。その小さなつながりづくりのハブの役割を公民館が担うことが大切である。

外国人も対象とした取組をきっかけに、日常生活に関する相談機能を公民館が持ち、気軽な相談場所として定着していけばよい。

広報の際、外国人も対象の表記なしでも参加してもらえることが理想ではあるが、外国人の方が、自身が地域の一員と認識していない段階においては、表記が参加のきっかけとして有効である。日本語が得意な方は社会教育等に参加できるかもしれない。様々な段階で、日本人、外国人両方を対象としていくことが大切である。

災害発生時等、非常時には難しい日本語が飛び交うかもしれない。やさしい日本語以外の企画に参加してもらうことも大切である。やさしい言語だけ使っていると、次の会話の段階に入っていけない。簡単な日本語による取組と、普段使いの日本語による取組両方必要である。

公民館活動に参加していない人をいかに取り込むか。まずは中高生を上手に巻き込みたい。外国人を対象とした取組は、若い人たちも参加が可能ではないか。

委員

時間的な制限や部屋の空き具合等は各公民館で異なるが、岡山市の取組事例を基に、公民館でできることは多方面にあると思った。生活する上で生じるゴミや買い物等の課題は、日本人が移住する場合も直面するが、外国人の場合はなおさら大変である。

公民館は、来やすい雰囲気や環境づくりが大切である。さまざまな理由により社会との接点が少なくなった方にも来てもらえる公民館にしたい。100点満点を目指さずとも、公民館職員が、調べ、寄り添い、前に進む意識が大切である。

委員

外国人の来日理由は様々であるが、外国人を雇用している企業には、従業員が日本語講座を受講し日本語力が高まることはメリットとなる。地域内の企業へ、外国人対象の日本語講座を発信していくことが有効である。

また、子どもの保護者同士の口コミで公民館活動を広げてもらう方法や、外国人を対象とした講座に、国際交流として子どもたちに参加してもらうのもよい。

## 【グループ2】

委員

外国人の方から見て、自分たちのために企画されたイベントと分かる発信やしくみづくりが必要である。

委員

多文化共生とは主に、語学習得、コミュニティへの参画、困りごとのサポートであると考えた。

コミュニティへの参画にはグラデーションがある。観光的な参加から始まり

徐々にコミュニティに参加してもらおうのだが、共同体に溶け込んでいく過程では、必ずその共同体に変化が迫られる。全く異なる他者が共同体に入るのが当然である。コミュニティへの参画は、共同体に変化が迫られるときのデザインのことである。そこで大切なことはお互いの理解であり、土地や文化についての情報交換である。今住んでいる地域は同じであるが、持っている文化は異なっており、共通性と相違性を情報交換することが交流においては大切である。

また、食や文化については多くの人にとって関心が高く、企画に参加したい人は多いため、国際交流に関連する企画はコンテンツとしては強い。

委員 中学生、大学生を巻き込む方がいいという点では、玉野市は外国人旅行者が多く、中高生のガイドボランティアを募集し、外国からの旅行者とコミュニケーションをとる取組を行っている。大人どうしのつながりの中に子どもが入ることで、子どもは多文化に触れることができ、外国人の方はつながりをつくることができるため、お互いにとって良い。

副会長 学びたい、地域の一員になりたいと思う以前に、困ったときに助けてくれる場所を知っておきたいのではないかと。困り事の相談場所、医療機関等の情報を公民館から発信すれば、来やすい場所になるのではないかと。それをきっかけにこんな楽しいことがある、もっと知りたいことがあると派生していけばよい。京山地区は留学生や若者も多いが、外国人が少ない地域は、地域住民との知り合い方、仲間づくりにおいて、公民館側からの発信が必要である。

自身の留学経験では、タウンガイド、市民の広場のような情報誌に目を通し、1つのきっかけから他のものを見つけることができた。行政の広報でも、病院の場所や飲食ができる場所をセットにして記載した簡易的なものがあればよい。

委員 日本語がまったく分からない人もおられる。確実に情報を届けるには多言語で表示するほうがよいのではないかと。

事務局 アプリ等で言語は変換できるようになってきている。SNSやインターネット等による発信力、困りごとのサポート、子どもが入っていくという点がグループ内で共通した視点ということでしょうか。

### 【グループ3】

委員 地域のつながりづくりが重要である。「障害者」、「外国人」等とカテゴライ

ズせず、計画段階から多様な方が参加することを視野に入れると事業内容がより充実する。

外国人の居場所づくり等においても、公民館で全てを実施できないため、公民館を介してコミュニティが自走するしくみが大切である。

委員

真庭市には外国人の方が約300人程度おられ、そのうち公民館を利用している方は50人程度である。公民館は、勉強したい人を大切にして活動を広げていくという元来の趣旨を大切にし、教育、福祉、危機管理等それぞれの行政部署と仕事を仕分けしていくことが大切である。災害時に公民館は、危機管理担当課と同じようにはできないし、する必要もない。共生社会の中で公民館が行うべきもの、他機関が行うものを明確にし、集中的に取り組むことが大切である。

委員

京山公民館はファーストステップをうまく取り入れている。1回来てもらふことのハードルが高い。また、岡山市の公民館はその後の活動にもうまくつなげている。

高梁市でも松山踊り等通じた外国人との交流や取組を行っているが、岡山市は継続して取組まれているところが良いと思った。

事務局

コミュニティづくりにおいて課題は多いが、限られたリソースの中、何を中心とするか、「選択と集中」という意味において、お二人の委員が言われた話はつながる。

委員

人と人をつなげる仕事は公民館の主要な仕事である。地域のハブになることが公民館の仕事である。

委員

地域で、どのようなコミュニティをつくりたいか言語化し、共有することが必要である。その目標達成のための事業実施を考えると良い。最終的には公民館が、地域のコミュニティを維持せず、地域の状況把握と知識を提供する場として機能し、人と人、情報と人、情報と情報をつなげる役割をしていけばよい。

委員

公民館はハブになればよい。主催講座で生まれた学びの輪、それをきっかけに生まれた学びの輪と広がることが理想である。

## 2. 全ての人のウェルビーイングの実現に向けて、今後求められる方策について

### 【グループ1】

#### ① 多様な機関や団体とネットワークを作るためには

委員	周辺機関や団体のリサーチが必要である。聞き取りや協働できることを考え、知り合いづくりを積極的に行っていく。
委員	公民館利用団体のお互いの交流により、つながりや新しい企画、連携が生まれる。
委員	企業等に声をかけ、公民館を知ってもらい、他機関から提供してもらえるものを知るところから、ネットワークを広げていく。

#### ② 多様な人が利用しやすい環境をつくるためには

委員	入りやすい雰囲気づくり。閉鎖的な雰囲気を取り除く必要がある。
委員	困り事相談や悩み相談等、気軽に足を運んでもらえる場づくりからつながりに発展していけばよい。
委員	文化や特性により色の見え方、サインも異なっている。誤解を生じないようバリアフリー等の見直しも必要。他者との違いを知り、違いをお互い楽しめる環境づくりもよい。

#### ③ 公民館のイベント等に多様な人が参加するためには

委員	公民館職員が平素から住民を知る（どんな人が住んでいる）努力は必要である。
委員	学校授業の地域学習等で、子どもたちが社会教育施設について学習する際は、公民館が出前授業を行い、知ってもらおう機会としたい。
委員	公民館サポーターを増やしたい。声かけ等により多様な人に参加してもらいたい。

#### ④ 「学習したい活動」「学習すべき活動」をバランスよく実施するには



委員 活動内容は地域により異なる。学習したい講座参加者から一本釣りにより学習すべき活動へ誘う。

⑤ 参加するだけでなく参画してもらうためには

委員 やりたいこと、困っていることを聞き取り、つながりをつくる作業の積み重ねを、企画する。

委員 公民館サポーターとして御協力頂ける方を年齢問わず多分野で募集する。

委員 目標を持てるよう誘導し、「困ってますか？」などの声かけから、ニーズに合う取組への誘導を行う。

⑥ 公民館職員がアシストに徹することができるようにするには

委員 公民館が、イベントや企画を公募し、応募者が実施者、公民館はサポート者として事業を実施する。

委員 地域住民、移住者、外国人の参加者から感想をこまめに聴取することで、アシスト方法のヒントが出てくる。アンケートや声かけから感想を聞くこともできる。

他、グループ1の意見

委員 若者の居場所づくり実施団体で、公民館は高齢の方が参加する場所であり、自分たちが利用するイメージを持ってないと若者から意見が出ていた。公民館機能を知ることで既存イメージが変化するだろうか。

また、子どもの普段の活動に公民館が入っていることが大切である。

委員 自習場所が必要である。自習ができない図書館も多い。自習スペースを作った公民館を視察したところ、子どもたちが集まっていた。

市単位で年度ごとの公民館テーマを設定してはどうか。少ない公民館職員で業務を行う中、多少楽になるのではないか。

委員 私が勤務する公民館には近隣小学校から職場体験に来る。体験時間は限られた時間であるものの、保護者もサポートに来られ、公民館職員の仕事を体験し

てもらおう。それを機に、公民館に立ち寄ってくれる小学生もいる。学校や企業等に協力してもらえればよい。

(グループ1 発表)

公民館職員が地域のことを調べることで、公民館に何が求められるか分かる。また、入りやすく使いやすい雰囲気づくりをし、自由に使い、気軽に入れる場所を設置すれば、参加を促す入り口になるのではないかな。

困り事や悩み相談等をきっかけに公民館に足を運んでもらい、多様な講座の存在を知ってもらえればよい。

多様な方に使われることを想定し、公民館の建物の色、宗教に関わらず使える表示等、建物内外の表示にも配慮が必要である。また、参加者から公民館のイメージを聞き、少しでも身近に感じてもらえるよう改善したい。

当該年度の公民館のテーマ設定等は県や市町村単位等で行い、少ない公民館職員での運営サポートが必要である。

また公民館サポーターを募集し、1年を通して手伝ってくれる人を増やしたい。公民館講座や企画を公募し、応募者を実施者、公民館職員をサポーターとして取り組んでいけば良い。

【グループ2】

① 多様な機関や団体とネットワークを作るためには

委員

株式会社の場合、業務をとおして利益を出す必要はあるが、その中でも職員には幸せを感じながら過ごしてもらいたい。外国の方も来日に当たり何らかの組織や団体に加入している方もおられるのではないかな。株式会社、組合などは公民館とのつながりが少ない。営利団体(株式会社、組合等)が公民館で活動・参画しやすくなると良い。

委員

ネットワークやつながり形成には、公民館職員が主体的、積極的に専門知に触れる必要がある。外国人支援のノウハウについて教を請うことでネットワークも作ることができる。

② 多様な人が利用しやすい環境をつくるためには

副会長

対象者は高齢者に偏る。日中働いていると公民館に寄れない。仕事帰りや子どもたちだけで学校帰りに行ける状況でなければ公民館に行かない。親が行か

なければ子どもも行かないため、働く人を取込み、日常的に通える状態にしなければ利用者層の掘り起こしはできない。

委員 公民館に来ていない人を取込むには、多言語表記や移動支援が必要である。そのための柔軟な予算執行が必要である。

副会長 移動支援が必要である。公民館が中学校区に1つで家から遠い場合、イベントや企画があっても子どもを1人で参加させることができない。保護者が送迎できない場合、迎えにきてくれる地域の方や、小学校集合等の工夫が必要であり、公民館フレンドのような方がいるとありがたい。外国人もウェルカムと表記すれば来てくれた事例のように、分かりやすいマークがあるとよいのではないか。

③ 公民館のイベント等に多様な人が参加するためには

委員 土日祝日や夜間に参加しやすいイベントを行うことがマストである。

委員 公民館活動に主体的に関わる人ばかりではない。誰かに誘われたから来たという受動的な公民館活動もよい。アウトリーチのテクニックが必要となる。

委員 広報の仕方に工夫が必要である。まず知ってもらうことが大切である。岡山市の事例においても、事業名に、「外国人、日本人」を付したことで外国人の参加が増えたと言われていた。対象や内容を明確にした広報が必要である。

④ 「学習したい活動」「学習すべき活動」をバランスよく実施するには

委員 学習したい活動から入り、徐々にそれに関連した学習すべき活動に移行していけばよい。中長期的視点で見ればよいのではないか。

委員 かつて公民館での学習が積極的であった理由は、共同体からの要請があったからである。コミュニティの結びつきが弱まった現代では、公民館で学ぶ必要はないと考える人が多い。基礎自治体等から地域コミュニティ形成の支援をするほうが良い。

委員 どのようなニーズを誰が持っているか、分からないところも多い。公民館利用者がしたいことを認識した上で活動し、そこから事業の精選をすればよい。

副会長

公民館で学びたい人は少ない。学習について考える以前に居場所について考えたい。中学生の居場所として公民館の自習室設置が増えた。自分の好きな本を持ち寄りただ2時間過ごす、ビブリオバトルのようにお互いに本の紹介も行わず、読むために集まり楽しんでいるような集まりが最近はできている。学習はしないが、好きな漫画を持ち寄って読む会等、居場所づくりからまずは実施してみてもどうか。学習したいレベルではないが、ただ人と集まりたいニーズは、調査すればあるかもしれない。

⑤ 参加するだけでなく参画してもらうためには

委員

楽しくないといけない。参画が義務や責任となり、負担感を感じる人も多い。

委員

今、自分は物語の主人公であり、主体的に参画できていると実感できる巻き込み方が必要である。例えば、この地域で日本語講師をする、その主人公は自分自身であり自分の物語であると実感できれば、参加でなく参画ができている。参画できるよう公民館職員が支援していくとよい。

また、公民館職員が事業を実施すべきと考える住民と、自治こそが重要であり住民が主体的に動くべきと考える公民館職員で平行線になる場合には、館長のマネジメント力が重要となる。

副会長

何かをプロデュースしたい方がいれば、「公民館職員がサポートするので企画してみませんか？」等、講座の枠を試験的に公募してみるのはいかがでしょうか。挑戦したい人がいればやってみたら良い。

⑥ 公民館職員がアシストに徹することができるようにするには

委員

困り感やニーズを整理し、それを解決するために適切な機関とつながることが大切である。

委員

主体となるボランティア等の自立を支援、育成すれば、公民館職員がアシストに徹しても、それぞれがグループごとに自主的にイベントを企画していくのではないかと。公民館はボランティア等のサポート、育成が大切である。

他、グループ2の意見

委員

ニーズを整理し、参画当事者が楽しめる企画を考えることが大切ではないか。

委員 調査→企画→参画→包摂という順序であるためそのとおりである。

委員 「誘われたから行く」という参加、参画も大切である。

委員 そこに集まった人でただ読書している状態は、カフェで読書する状態と近い。同じ空間にいながら個々人が孤独を楽しんでいる状態にはアウトリーチ手法が必要である。あなたはこの空間のメンバーであると誘われると、次のステップにつながるかもしれない。

副会長 人口減少が進む中、新しい人材や目線を取り入れるには、異なるタイプの人を取込み、今まで対象から外れていた人に入ってもらい必要がある。外に出て行く力と、外から誘う力がうまく起動する必要があり、今まで以上にアウトリーチが必要である。

委員 調査→企画→参加→参画→自治のプロセスである。公民館のゴールを「参画」とすると、まずニーズを整理し、企画する必要があるが、忙しい現代では、学びたいと考える人や、足を運んで学びに参加する人そのものが少ない。  
行きたいから行くという主体性と、あなたに参加してほしい、参画してほしいという誘い方による受動的な参加、両方あると良い。様々な PR 方法により誘うことも必要である。

### (グループ 2 発表)

公民館の目標を住民自治とすると、手順としては、ニーズ調査、企画作りを経て、参加者、参画者が生まれ、自治となるが、忙しい現代は学びたい人が少なく、学ぶ意思はあっても時間的、距離的制約もある。主体性の希望（学びたいから公民館に行く）と合わせて、受動性の希望（誘われたから行く）両方あると良い。この場は、あなたのために設けられているので来てくださいと誘い、誘われたので行くという受動性の希望である。行きたいから行く、誘われたから行く、両方のデザインが重要である。そのために様々な PR 方法も必要となる。

### 【グループ 3】

- ① 多様な機関や団体とネットワークを作るためには

委員 やりたいことをしようと思えば、信頼と安心感が必要である。

委員 行政、社会福祉協議会、会社等と「協働するところ」と「仕分けするところ」

をお互いに共有・確認することも大切である。

委員

複数の団体が交流する場を活用（文化祭、マルシェ等）し、顔なじみになる  
ところから始める。情報掲示板等の活用等も大切である。

② 多様な人が利用しやすい環境をつくるためには

委員

利用ルールが少なく、使い方に柔軟性がある環境が必要である。職員が利用  
者と対話しながらルールを作れるとさらに良い。

委員

ユニバーサルデザインは一定の基準ではあるが、外国人も含めた多様な人の  
使用を想定する場合、さらに細かい気配りが必要であり、ソフトとハード両方  
の充実が必要である。

委員

施設のピクトグラムの充実が必要である。

③ 公民館のイベント等に多様な人が参加するためには

委員

対象者をカテゴライズせず、外国人、日本人、子ども、大人も全ての人を対  
象に共に学べる環境がよい。京山公民館のチラシにも、「外国人も、日本人も  
可」と記載があったように、様々な人が対象であることを知らせる必要がある。

委員

好きなイベントは個々人で異なる。多様なジャンルが用意されていることが、  
参加しやすさにつながるのではないかと。

委員

会社での悩み、心身の悩み等を抱えているのは日本人も外国人も同じであり、  
悩みに対応できる機関とつながっていることが大切である。多様な存在と多面  
的な問題に対し、細かな配慮でウェルビーイングを達成していくことが必要で  
ある。

④ 「学習したい活動」「学習すべき活動」をバランスよく実施するには

委員

ニーズの把握と課題の把握はもちろんであるが、「学習したい活動」、「学習  
すべき活動」をバランス良く行うことは難しく、公民館は「学習すべき活動」  
に力を入れて、「学習したい活動」は、自主的な学びが発生するように仕組み  
づくりをしていけばよい。

委員

企画の段階は公民館が実施し、軌道に乗ってきたら公民館は少しずつ手を放していけるとよい。

⑤ 参加するだけでなく参画してもらうためには

委員

参画とは、主体として計画を実施することであるが、取り組む人の自己実現が繰り返し行われる状態でなければならない。

委員

外国人も講師になってもらうとよい。

委員

岡山市の事例は、講師の起用方法が秀逸である。

⑥ 公民館職員がアシストに徹することができるようにするには

委員

経営視点、組織ビジョンを掲げ、それを公民館職員が理解し納得することが必要である。職員が行政、企画側、参加者、住民と対話することが必要である。

(グループ3 発表)

多様な機関や団体とのネットワーク作りには、各団体ができることをまず共有することが大切である。あわくら会館では民間企業や外郭団体も含めた昼食会等を実施し、各団体が取り組めることを共有している。

多様な人が利用しやすい環境づくりには、ユニバーサルデザインやピクトグラム等のハード面による配慮と、利用ルールを少なくする等のソフト面での配慮、両方が必要である。公民館には利用にあたり条件等もあるが、職員が利用者に使い方を聞き取り、対話の中でルール設定していければ良い。

多様な人が参加するためには、参加者をカテゴライズせず、細かな配慮が行われる状況が必要である。

「学習したい活動」「学習すべき活動」をバランスよく実施するための公民館の役割としては2軸ある。「学習すべき活動」は公民館が積極的に行う必要があるが、「学びたい学習」については、公民館が実施し続けるのではなく、入り口作りに重点を置けばよい。

参加するだけでなく参画してもらうためには、個人が学びたいものがあり、自己実現が繰り返してできる環境が必要である。岡山市の公民館においても外国人に講師になってもらうことで、本人の自己実現につながっていた。

職員がアシストに徹するために、公民館も経営視点を持ち、KPI等により自分たちが達成すべき指標を把握・理解し、運営していくべきである。

会長

短い時間で質の高い協議となった。岡山市の取組が示唆的であったからこそ議論が深まったと感じている。

全ての人のウェルビーイングを実現するために研究を進めてきた。中高生、障害のある方、外国人等多様な存在の中でも、マイノリティに対して目を向けることが重要であると認識できたのではないか。一方で、多様な人々の存在に目を向けると少数の人だけの講座を企画し実施してしまいがちであるが、対象者をカテゴライズしないという部分が大切である。本日の岡山市の発表のように、外国人のためとカテゴライズせず、地域の人が共に参加し実施して取り組むことが重要である。

また、入口支援という意見があった。我々が様々に提案すると、小規模館では難しいと考えられがちであるが、公民館の役割としては「入口支援」が重要であるという提案は理にかなっている。今後もさらに議論を深め、皆さんとまとめていきたい。